

効率先の工業的手法を変えて 健全な「農と食」を取り戻す道を

狂牛病。家畜福祉。遺伝子組み換え作物をめぐって



30年前はごく当たり前だった放牧風景がめっきり減り、自給飼料が生産できる土地が広がる北海道でも工業的な酪農が増えている(写真右、別海町内)

ルポライター 滝川 康治

連載は2002年夏から始まり、すでに40回を数えた。後半の約2年は、遺伝子組み換え(GM)作物の栽培規制条例をめぐる動きをはじめ、家畜福祉や有機農業、グリーンツーリズムなどを取り上げることが多く、「北の大地」が抱える可能性や課題が浮き彫りに……。最近の出来事や取材時の裏話を交えながら、2回に分けて「中間リポート」をお届けする。

いびつな生産構造を問い 狂牛病の感染源など探る

ライブドア前社長の逮捕劇があった一月二十三日、農水省は国内二十一例目となる狂牛病(牛海綿状脳症(BSE))が確認されたことを発表した。根室管内別海町の牧場で飼育されていた二〇〇〇年九月生まれの乳牛で、その三日前に死亡し、検査に回されていた。死亡牛では五頭目のケースになるが、ホリエモン騒動にかき消され、新聞やTVニュースの扱いはごく小さいか皆無であった。

これで、確認された北海道生まれの感染牛は十六頭(全体の約7割)に上る。かつて意識的に肉骨粉や血粉などを与えていた農場のなかから感染牛が発生したのは今回が初めてだ。感染源と感染経路はいまだ解明されぬ状況は変わらず、シワジワと確認頭数が増える——そんななか少しずつ実態が明らかになってきた。

本誌〇五年八月号でわたしたは、感染牛の出生時期と感染源について分析した。九五―九六年に生まれた牛が十三頭と大きな集団を形成している。そのすべてに全農系の科学飼料研究所(群馬県)が製造した代用乳を飲ませており、原料のオランダ産の牛脂が感染源の疑いが濃厚——と、畜産研究者の論文などに基づいて指

摘。さらに、「気になると」として、二〇〇〇年生まれの子牛が増え、十勝で集中発生している事実も示した。

今回の確認によって、その〇〇年生まれの感染牛が合計五頭になり、地域的には道東と道央に偏在している。感染源は、代用乳の原料の牛脂や血漿タンパク、それとも肉骨粉類なのか、まだわからない。この集団は増え続けるはずであり、今後の行方を注視しつつ調査を続けたい。

いまでは、外国産の穀物を主体にした濃厚飼料を大量に食べさせて牛乳の生産量を増やし、わずかに二―三産、人間でいえば三十代くらいの若さの牛を用済みにして屠場に送る、いびつな酪農が主流になってしまった。草地面積が広い北海道でも、輸入牧草を食べさせる農場が増え、「土・草・牛」が循環する農業のあり方が失われた。これでは健全な「食」は保証されるはずもない。

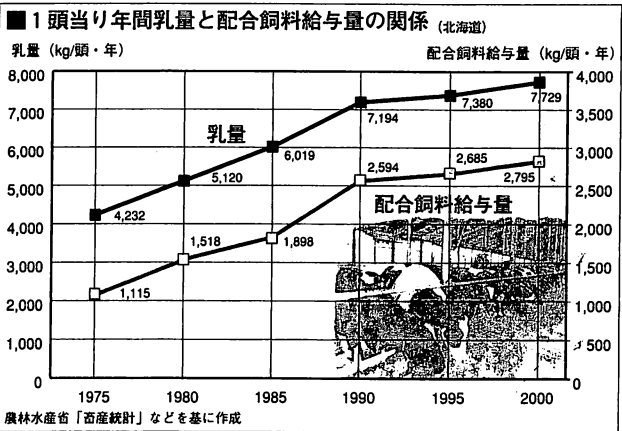
そんな生産構造の変化と経済のグローバルズムの下で日本列島に狂牛病が上陸したわけで、「起きるべくして起きた薬病」とわたしは表現してきた。この病気の根源には、牛たちの健康を軽視した効率優先の飼いがあつた。だから、中間のシステムをいじりまわすよりも、生産構造のひずみを正していくことを優先させるほうが根本的な清浄化対策になるはず——と、あらためて強調しておきたい。

ここに乳量と配合飼料の給与量の相関を示すグラフを再掲した。この右肩上がりカーブのなかに、牛たちの悲鳴や規模拡大でゆとりを失った農場の状況が表れている。その延長線上に狂牛病が発生した……。そんなふうに見える、かしい消費者が増えてほしいものだ。

牛に鶏糞まで食べさせる アメリカ畜産の危うい姿

年明け早々、輸入を再開した米国産牛肉に特定危険部位(SRM)の脊柱が混入していたことが明らかになった。さらに、閣議決定した食肉処理場の事前査察をやつていかなかったことも発覚し、国会で大きな問題になっている。

本誌八月号のなかで、「牛が糞尿にまみれていて品種確定が間違つてしまい、また、サンプルの組織が他の組織と混じつ





GM作物の規制条例をめぐり、腰の定まらない道の検討会で意見を述べる消費者委員(04年10月、札幌市内で)

健康で幸せな家畜から
安心な食品を提供できる
昨年の連載のなかでわたしは、「家畜の健康と福祉」をめぐる話題を計四回にわたってレポートした(6・7・10・11月号を参照)。

前出の狂牛病は家畜の生命や健康にか

GM作物の規制条例をめぐり、腰の定まらない道の検討会で意見を述べる消費者委員(04年10月、札幌市内で)

GM大豆の栽培騒ぎの経緯めぐる農家の話から
遺伝子組み換え(GM)作物の栽培を規制するための道条例が昨年三月に公布され、この一月から運用が始まった。紆余曲折をへて制定された条例は、罰則規定を盛り込んだ内容になったもの、研究機関などが行なう試験栽培には甘いなどの問題点を抱える。GMフリーの大地をめざすために、わたしたち道民の生き方が問われている。

このシリーズでは、〇四年春から一年間で五回にわたるGM作物問題を取り上げた。GM大豆の栽培騒ぎの経緯めぐる農家の話から

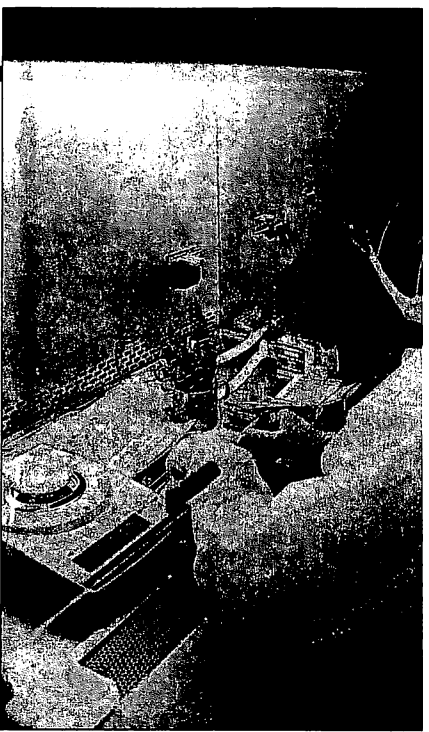


長沼町の農家がGM大豆の栽培を計画し、大きな波紋を広げた。地元の農協を訪れて「栽培拒否」へ提議を求める市民団体の人たち(04年10月)

かわる問題であるし、現場を訪れるたびに尻尾のない牛を目にして憤りを感じていたことも執筆のきっかけだった。家畜福祉の問題を追求する研究者らとも知り合い、静岡県放牧養豚場取材する機会もできた。昨春、国際動物保健機関(OIE)167カ国加盟は家畜福祉に関する初の国際基準を採択しており、タイムリーな記事になったと思っている。「家畜の健康と福祉」をテーマにしたセミナーの内容も、回に分けて紹介した。この「家畜福祉」という言葉は「ファームアニマル・ウェルフェア」の訳語。日本では、一般の人にはもちろん畜産関係者にもなじみが薄い。「ウェルフェア(Welfare)」には、幸福とか繁栄の意味があるので、「福祉」よりも「家畜が幸せな状態」というふうにイメージするほうがわかりやすいだろう。

由を真っ先に言わないといけない
といった真つ当な発言が相次いだ。が、残念ながらこうした意見はまだ少数派である。規模拡大による利益追求の流れは止まらないし、「家畜福祉? いや、人間の福祉のほうがどうなるんだ」と反発する生産者も多い。

そんな状況なので生産現場が変わるまでは時間がかかるだろうが、時代は動きつつある。ストレスを少なくすることによって、家畜も人間も健康で幸せになれるし、安心できる食品を提供できる。このことに共感する人は多いはずだ。多少なりとも現場を知る者として、今後もしるんなり口で伝えていきたい。



連日行なわれる狂牛病の簡易検査。アメリカとは対照的な全頭検査が消費者の安心感につながった

狂牛病問題を生産システムの視点から考えることが多い。今回のケースでも、食肉の安全性の面から捉えるだけでは本質を見失うのではないだろうか。

由来の製品を拒否し続けてほしい」と訴え、危うい状況をこう指摘した。
①(米国では)牛に牛をエサとして食べさせることを完全に禁止できる措置が実施されていない
②感染牛を人間の食料チェーンから完全に排除することを目的とした検査が全く行なわれていない
とりわけ①では、肉骨粉の表示義務を課しただけで、血液と動物性油脂にはその義務はないこと、「年間九十万トンの鶏糞が牛の飼料の原材料になっている」という、おぞましい事実が紹介された。

牛肉検査は本質ではない
効率優先の畜産こそ元凶
したがって、単に特定危険部位の混入や査察問題だけに目を奪われると危険ではない。信頼のおける海外情報を提供してきた農業情報研究所の北林寿信さんは、ホームページ(www.jinfo.dti.ne.jp/eng)のなかでこう指摘する。

昔の乳牛には発生しなかった「第四胃変位」の手術。繊維分の多い粗飼料や運動が不足すると起きやすい生産病だ
結局、健全な「農と食」を実現していくには、家畜の生理や生態に即した飼育を進めていく、消費者は「安心」だけを追い求めない、関連産業も効率最優先から



GM作物を売りこむモンサント社主催の講演会。関心を示す大規模農家も(05年2月、札幌市内で)

場主に取材要請すると、「貴方には問題ないけれど、北方ジャーナルの取材ならダメだ」と拒否された。過去に何かあったのか、ついに明らかにしなかったが、本誌が嫌いらしい。わたしはもちろん、編集長も説得に努めたが応じてもらえず、一連の連載のなかで当事者の意見を紹介することはできなかった。

後日、その農場主から話を聴く機会があった。有限会社をつくって八十数ヘクタールの畑に小麦や大豆を作付けしている彼は、わたしよりも四歳若い。けつこう勉強家で英語はペラペラ、農閑期には渡米して情報収集をすることが多いとか。わたしとは正反対に、効率万能のアメリカ

カ農業を信奉する人物である。一番気になっていたのは、この農場主は過去にもGM大豆の栽培経験がある、という点だ。本人に事実関係を尋ねると、次のような答えが返った。

①(GM作物の商業栽培が認可された) 九六年、モンサント社が開発したGM大豆をアメリカの農家から分けてもらい、自宅のプラントーに十粒ほど蒔いてみた。ラウンドアップ(同社製の除草剤)を大豆にかけても枯れないので、「本格的に作りた」と思った。

②九七、九八の二年間、自分の農場五ヘクタール前後でGM大豆を栽培した。種子は、知人に頼んでアメリカのカントリーエレベーター内のモンサント代理店で買ってもらった。購入にコネはいらない、カネさえ出せばOK。外国で車を買うのと同じこと。「雑草が生えず」と楽しんだ。素晴らしい大豆だと感じた。

③収穫したGM大豆は空知管内の業者に売った。「GM」と言わなかったし、先方も聞かなかった。

④当時、十勝や網走などの農家がうちの大豆畑を見学した。「ラウンドアップをかけても枯れないよ」と百人くらいに説明している。

「日本で初めてGM大豆を商業栽培した男」の話を長々と紹介したのは、二年間で三百俵(60kg/俵)近いGM大豆が、そ

れと識別されることなく味噌や豆腐、納豆などに加工され、食卓に上っていたからである。GM作物、食品を敬遠する消費者は圧倒的に多いし、人体や生態系におよぼす長期的な影響も解明されていない。「消費者のことは考えていない」と無責任に言い放つこの農場主が語った栽培の経緯は、なんとも怖い話だし、あの騒動のなかで一番深刻な問題だったのではないかとあらためて思う。

GM試験栽培に抜け道も 腰砕けになった道の対応

GM作物をめぐる記事のなかでわたしは、「農家による一般栽培はダメ」「研究機関による試験栽培はOK」という、道が打ち出したダブルスタンダードを強く批判してきた。

「道産食品の安全・安心」を売りこもうとする道は当初、「開放系での栽培の中止」を求めるきびしいガイドラインを策定しながら、研究機関などの栽培試験に抜け道をつくってしまった。バイオ推進団体や経済界、一部研究者らの反発に配慮したためである。

これが命取りになり、条例制定に向けた取りくみは腰砕けになっていく。経済界は「研究の芽を摘むな」と自民党や知事サイドに働きかけ、矛盾した方向に大

きく後退。道庁内でも、規制に積極的な農政部と経済界べつたりの経済部との対立があり、前者が敗北した。

道内を代表する経済団体から取材したときの雑談。「対応した幹部職員は有機農業について、「ウンコやおしっこをばらまいてやる農業。そんなので良い作物ができるの?」といったお粗末な見方を披瀝した。本道経済にもたらす農業の価値をよく理解していないようだ。GM作物についても申しり、であった。

種の壁を超える手法で新たな作物をつくることは、自然の摂理を冒瀆するもの。生態系への悪影響もある——というのが、GM作物に対するわたしの基本姿勢。同じ開放系での栽培なのに、「試験」と「一般」で異なる対応をすることは差別ではないだろうか。矛盾する方針を決めた道には、「GMフリーの大地をつくり、消費者の期待に応えていく」という理念や哲学が欠けていたのである。

GM作物の栽培問題は、ある時期に推進の機運が再燃することが予想される。「食の安全・安心」にむけた各界の取りくみや、静かに広がるスローフードや有機農業などの動きとGM作物の栽培とは決して相いれない。そうした視点を基本にしつつ、この北の大地から「農と食」のありようを考えていきたい。

(次号につづく)